近江のケンケト祭り ―中世囃子物の伝統―

民俗芸能研究家
青盛　透

はじめに

ケンケトという名称はあまり聞き慣れないことばなので、祭りの名前だというと、なにか変った祭りのように思われる人が多いようです。現在、滋賀県でケンケト祭りという名称で知られているのは、蒲生郡蒲生町岡本高木神社・上麻生旭野神社を中心とする祭礼と野洲郡竜王町山之上杉之木神社・蒲生町宮川八坂神社を中心とする祭礼、それに甲賀郡甲賀・土山両町に氏子圏をもつ瀧樹神社の祭礼です。高木神社の祭礼は毎年４月23日前後の日曜日、杉之木神社と瀧樹神社の祭礼は毎年５月３日に行われています。

ケンケトの祭りには長刀振りや踊りの奉納芸能があって、類似する守山市杉江の小津神社・幸津川下新川神社のサンヤレ踊りや長刀振りとともに「近江のケンケト祭り・長刀振り」という名称で昭和59年12月20日に「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」として国に選択されています。

ケンケトの意味

ケンケトということばは不思議な響きをもっています。それではケンケトとはいったいどういう意味なのでしょうか。

この名の由来については、いろいろな説があって、伝承を比較すると一致しません。瀧樹神社の氏子圏では、祭礼芸能に出る踊り子が片足跳びでステップする、つまりケンケン跳びするからだといっています。ところが杉之木神社や小津神社の場合には、長刀振りの芸能をともなうのですが、その芸能がケンケトだと説明されていたようです。瀧樹神社以外では片足跳びの芸能は目立ちませんし、瀧樹神社祭礼には長刀振りはありません。どうやら同じケンケトの名前でも、同一種類の祭礼とは簡単に言えそうにありません。

杉之木神社のケンケト

蒲生郡日野町鎌掛付近に伝わるわらべ歌に「七夕焼きの歌」や「地蔵盆の歌」というのがあるのですが、「ケトン　ケトン　ケトケンケン」とか「ケンケトケン」というフレーズが出てきます。一種の囃しことばのようですが、これは鉦（かね）の音の口まねに相違ありません。京都府丹波や丹後地方の祭礼でも、鉦の音を「ケンケン」という場所があります。京都府

福知山市では、３月１５日に「お釈迦の鼻くそ」といって、子供が「ケンケンドンドンケンドンドン」と囃しながら空豆をもらいに行く行事がありました。

口三味線といういい方がありますが、たとえばチントンシャンとかテンテコテンとか、西洋音楽のような譜面がない日本では、楽器の演奏方法をことばにして教えていく方法が昔からあります。雅楽では譜を口伝えする方法を唱歌といいます。これにならって、伝統芸能の世界でもこの方法を口唱歌と言い習わしています。

このような例をみると、ケンケトというのも、実は鉦の打ち方を示す唱歌の一つではないかと気がつくはずです。つまりケンは一拍、ケトケンは二分の一拍、鉦の凸面を撞木で打ったときの響き方がケンケトケンと聞えるような状態を示しているわけです。

一見、謎めいた祭礼名称にみえますが、たしかにケンケト祭りには共通して大きな鉦の音が響きわたります。例外は高木神社の祭りですが、ここにはカンカという小学生男子の踊りがあります。しかし、カンカにはケンケト　ケンケト　スッケンケンという太鼓の唱歌が残っています。これは今は鉦がなくなっているため、鉦の唱歌だということがわからなくなったのでしょう。

ケンケト祭りという名称は、おそらくこのようにケンケトと唱えながら鉦を打っていたことから、付けられたと推定されます。したがって、もともとケンケトは特殊な祭礼を意味することばでもなく、また共通の祭礼の形式があったわけではないことになります。

瀧樹神社のケンケト

高木神社のケンケト

風流の様式

しかし、これらの祭礼がひとまとめにされて無形文化財とされているのには、それなりの理由があります。

それは風流（フリュウ）という中世日本の祭礼様式が顕著にみられることです。風流はいろいろな意味がありますが、一般的には華やかな意匠を意味することが多いことばです。祭礼で神霊の座を飾るさまざまな造り物や人々の衣裳も風流といわれます。祭礼と風流とは切っても切れない関係にあり、祭礼に付属する奉納芸能も風流で飾られるため、芸能そのものが風流とよばれることもありました。

蒲生町高木神社の祭礼では、上麻生地区からは行列の先頭を行く作り花の花蓋（はながさ）が２蓋出されます。また帯持ち（帯さし）という役があって、華やかな女性の丸帯で造り物の大太刀を拵え、高木神社に持参します。踊り子の少年もきれいな花烏帽子をかぶります。これらが風流という様式になります。土山町瀧樹神社の祭礼でもやはり花蓋が出て、こちらでは甲賀郡に多く分布する花奪いの行事となっています。踊り子の少年たちは山鳥の羽根で飾られた美しい烏帽子を身につけます。竜王町山之上と蒲生町宮川のケンケトでは、イナ

ブロといわれる鷺の造り物が出ますが、これが中世では風流といわれるものに相当します。

囃子物の信仰と芸能

風流が芸能化するというのは、神霊を宿らせた人形など造り物を引き回して最後に壊すという、中世の習俗と深い関係にあります。当時は伝染病が流行すると、疫（厄）神の祟りと考えて、この神を何かに宿らせて村境にまで引き回し、再度蘇らないように燃やしたり川へ流したり破壊したりしていました。

しかし、このような疫神はなかなか立ち去ってくれないため、歌や踊りで囃して移動させようとします。中世にはこのような芸能を風流囃子物といっています。

中世の囃子物芸能の特徴は、短く単純な歌で、繰り返しが多く、締太鼓・笛・鞨鼓・鉦・摺りササラの楽器を使用していました。なかでも、児童の鞨鼓（八撥（やっはち）ともいう）打ちが含まれていたのが大きな特徴です。ケンケト祭りには、歌舞が残っているものは少ないのですが、上記のような楽器をもった児童の踊り子が必ず含まれています。京都今宮神社や上賀茂岡本町などに伝承されている有名なやすらい祭りの踊りは、中世的な風流囃子物の様式だといわれていますが、ここでもケンケトと同様に鞨鼓の子供が活躍します。

囃子物の歌

現在伝統芸能として伝えられている狂言のなかにも、リズミカルな囃子物という挿入歌謡が残っています。狂言の台本が定着したのは近世初期といわれていますから、内容的には狂言の歌謡は中世後期から近世初頭のものと考えることができます。そこにあらわれる囃子物には、「げにもさや　ようがりもそうよの」という、現代風にいえば「そうだそうだまったくだ」という内容のフレーズを含むのが定式となっていました。ところがケンケト祭りで唯一歌謡を伝える瀧樹神社の例では、ケンケトケンと口唱歌を繰り返すなかで、「げにもさとない」という特徴的なフレーズがみられます。これは明らかに狂言の囃子物歌謡と同じ様式といえそうです。今では昔の歌の文句が失われたが、このわかりやすいフレーズと楽器の唱歌だけが現在に伝えられているのでしょう。

しかも現在のケンケトの歌は狂言とはまったく関係がありません。狂言の歌が挿入されたとは考えにくいところです。おそらく、狂言に伝えられた歌謡とケンケトの歌がほぼ同じ時代に流行していた歌であるため、両者に共通する様式がみられると判断されます。つまり、「げにもさあり」とリフレインする単純な歌謡が、中世に流行した囃子物の歌謡のスタイルだというわけです。

長刀振りの芸能

ケンケト祭りの特徴はもう一つ長刀振りの芸能がつくでしょう。長刀振りは高木神社の祭礼と杉之木神社の祭礼にみられます。瀧樹神社の祭礼には長刀振りが付かないのですが、代わりに踊り子の棒振りがあります。棒振りと長刀振りとは別のものに思えるでしょうが、同じように県内で長刀振りをもつ守山市小津神社の祭礼では、19世紀前半の記録では、長刀２５人の中に「ぼうふり」４人の名がみえ、幕末まで長刀振りの先頭には棒振りがいたことがわかります。

露払い役の棒振りが祭礼行列の先頭に出る形式は、中世後期の記録に風流の一行事としてたくさん例がみられます。また近世の京都

小津神社のサンヤレ

やすらい（京都市岡本）

祇園祭りを描いた祭礼図のなかには、前髪の若い衆が祭礼行列で長刀を空中に大きく放り投げる構図が描かれ、江戸時代の初め頃には長刀振りの芸能が祭礼行列にはつきものであったことがわかります。棒振りと長刀振りの組み合わせの例は、すでに１６世紀後半神崎郡能登川町安楽寺の祭礼にみられます。現行の長刀振りはおそらくこのような時代の伝統を伝えるものといえるでしょう。

丹後の太刀振り

長刀振りの芸能は、京都府宮津市付近を中心として丹後地方にも祭礼芸能として多く分布しています。現地では太刀振りまたは振り物といい、やはり棒振りが先頭に演じられます。この種の芸能は、笹囃子とよばれる踊りと組み合わせになっているのが特徴です。現在の笹囃子は江戸時代の初めに流行した初期歌舞伎踊りの歌を伝えるものとなっていますから、正確にいうと囃子物の歌謡より新しい時代のものを伝えていることになります。ところが「丹波志」という江戸時代の地誌には、笹囃子でも「げにもさあり」という歌を歌っていた記録があります。おそらく、笹囃子も古くは囃子物の芸能であった可能性があります。太刀振りと笹囃子という組み合わせと、長刀振りとケンケトの踊り子という組み合わせは、同一の形式と考えることができます。意外にも、ケンケト祭りの祭礼様式は各地に広がっているといえそうです。

守山市幸津川下新川神社の祭礼と杉江小津神社の祭りは、長刀振りを祭礼芸能としてもっています。そして、ここではケンケトとは囃しませんが、サンヤレという囃しことばをもつ踊りが伝えられています。サンヤレという囃しことばをもつ踊りは、県内では草津市・守山市や今津町などに広く分布しています。サンヤレの囃子は各地にみられますが、実は先に挙げた丹後の太刀振り・笹囃子にもサンヤレという囃しことばが使用されている地域があります。サンヤレの踊りも、またケンケトの祭礼様式と重なり合うものです。

むすびにかえて

ケンケトということばだけを頼りに、この種の祭礼を考えていくのは、現実には誤りだと思われます。ケンケトという名称をもった祭礼であっても、すべて一緒のものではありません。どんな古い様式をもつ祭礼でも、過去の様式をいつも忠実に伝えるわけではありませんし、事実、滋賀県のケンケト祭りも、芸能の伝承は断片的なかたちでしか残っていません。同様の様式の分布状態や様式を比較し、さらにさまざまな歴史的な情況を補って、はじめてそれが風流囃子物の芸能といえるにすぎません。

ケンケト祭りがいつからはじまったか、はっきりしません。しかしケンケト祭りの祭礼様式が中世日本の風流囃子物だということは、一つの手がかりになります。１５世紀から引続き伝承されてきたものか、あるいはもっと後に他地域から伝えられてきたものか、明確な答えは見つかりませんが、中世の祭礼様式を今に伝えていることは、高く評価されるに相違ありません。

滋賀文化財教室シリーズ No.181号
発行年月日　1998年10月５日
編集・発行　財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525